

スリランカの状況

スリランカで、4月に起きた連続爆弾事件では、各地のカトリック教会や外国人観光客が多いホテルが狙われ、300人近い人々が亡くなり、多くのけが人もありました。

コロンボのホテルでは、滞在する日本人家族の被害もありました。

事件は、国外の過激な組織と連携した少数派ムスリムの一部の集団が起こした自爆テロ事件と見られています。

スリランカでは、非常事態宣言により警察や軍隊による、逮捕や捜索・検問などが行われています

5月13日にバンダラナイケ国際空港に着きましたが、成田からの飛行機はガラガラで、2〜3割しか乗客がいなかったようです。

空港ビルの迎えのフロアも、閑散としており、一般の迎えの人が入れないのか、ホテルの案内人が出ていくと、待合室は一般の人は10人ぐらいしかいない状況でした。(飛行機の到着時間によるのかも知れません。)

大学で日本語を教えたお坊さんに迎えに来てもらったので、特に問題なく、空港からは出ることができました。

しかし、迎えの車は空港ビルに入る途中の検問で渋滞があり、予定よりだいぶ遅れて来ました。

空港では、内戦期のような、銃を突きつけて検問するようなこともなく、軍人や警察官も数もそれほど多くありませんでした。

ただ、空港の税関検査では、ムスリムの女性乗客が荷物をX線検査され、荷物を開けさせられている人もおり、警察犬の匂い探知も行われていました。

他の日本人乗客は、いつものように税関をフリーパスで通っていました。

これまでのように全身を覆う黒いブルカなどの女性は、空港では見ることがなく、カラフルなスカーフ・ヒジャブのようなもので顔をだしたまま頭を覆っている人が多かったようです。

これが、公共の場所での禁止事項なのか、自主規制なのか分かりませんが、これまでのスリランカの空港とは違うと感じました。

学生のお寺に向かう途中に、本屋でウェサックカードを買いましたが、いつもの年のとは違ってカラフルで多彩な種類のカードは、少ししか並んでおらず、安いハガキサイズのカードがパックされまとめ売り(100枚)されていました。

※ウェサックとは、仏教の開祖であるお釈迦様が、陰暦5月の満月の日に、誕生され、悟りをひらかれ(成道)、亡くなられ(入滅)たことを記念する行事で、仏教徒にとって大切なお祭りでもあります。日本に伝わった大乘仏教では、この3つの日はすべて異なっています。有名なのは、4月8日の花祭り(灌仏会)です。

この時期の多くある飾り用具なども例年とは違って少なく、いつもは店の表にたくさん積み上げられているランタンも少なく、ビニールカバーを掛けたままでした。

5月14日に、勤務先のホーマガマの大学へ来ましたが、キャンパスの正門の鉄扉は閉じられたままで、警備員が車の中を覗き込んで確認してから、門を少し開けるという状態でした。

予定では、来週から後期の授業が始まるはずでしたが、事件後の長期休校の影響でスケジュールが変更されていました。

大学へ来る途中の町では、これまでならバスターミナルや大きな広場で、ウェサックのトラナ(夜間イルミネーション)やダンサラ(無料給食・布施所)の準備がなされていましたが、全く見かけず、政府から人が多く集まる行事への規制・統制がされていると感じました。

街頭の商店でもまだ、ランタンを飾っているところは少力で、ウェサック前とは思えない町の雰囲気です。

5月14日には、北部などの地域でモスクやムスリムの経営する店舗などへの襲撃や略奪がおき、治安悪化が想定されるため、全土に夜間外出禁止令が出されました。

これまでもスリランカの歴史の中では、民族・宗教・言語の違いを背景に、政治的な対立が大衆的な暴動や対立、テロや内戦につながった苦い経験があります。

多くの政治家が、タミル人とシンハラ人、ヒンドゥー教と仏教という違いを強調することで、自己の政治的主張の大衆的支持を得ようとした結果、20年以上に渡る内戦を続けることになりました。

内戦が終わったあとも、その被害を受けた地域の復興や被害の回復、難民の帰還はまだ終わっていません。

こんな悲惨な事態が続いていた原因のひとつが、原理主義的な仏教僧の宣伝・扇動でした。

内戦途中での何回かの和解や休戦の動きのたびに、「スリランカは仏教徒の国だ」とか「このままでは仏教は滅びる」といった過激な主張がなされ、和解を進めようとした政治家への直接的な圧力もなされました。

こうしたことが続いた歴史的背景として、ポルトガル・オランダ・英国による400年以上の植民地支配とインドからの労働力の移入やそれぞれのキリスト教の布教と対立、地域の伝統宗教・文化の破壊、民族分断による管理支配があったことも忘れてはならないことです。

昨年にも古都キャンディでの、ムスリムと仏教徒の対立事件をきっかけに騒乱が起き、非常事態が宣言されました。

今回の爆弾事件をきっかけに、ふたたび民族・宗教・言語を理由とした対立を政治的に利用し、人々の心に憎しみの火種をつけようとするのが起きないようにしなければなりません。

この島の長い歴史の中では、民族・宗教・言語の違いを超えて、多く人々が共生してきた伝統があります。

お釈迦様は次のように説かれています。

「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死を恐れる。わが身にひき比べて、殺してはならない。殺させてはならない。」(ダンマパダ 129)

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息む(やむ)ことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」(ダンマパダ 5)と「憎しみの連鎖」を止めることを教えられています。

この地のすべての人々にとって、平和と和解が生まれるように念じています。

2019/05/17

スリランカで、4月に起きた連続爆弾事件の影響で、学校の休校が続いたりしていましたが、少しずつ正常化に進んできました。

ただ、5月14日には、北部地域などで、モスクやムスリムの商店街への襲撃や略奪がおきてしまい、政府から全国に夜間外出禁止が命令されました。

また、事件後に起きた住民の衝突やデマ・扇動を防止するためにスリランカでは、FACEBOOKなどのSNSに接続が出来なくなっています。(5月17日当地時間午後8時前に、接続できるようになりました)

昨年からの大統領と首相の政治対立によって、政府がマヒしており、治安機関への爆弾計画の事前情報があったにもかかわらず、対応が遅れたとの批判もあり、そういった政治批判も抑えることが目的なのかも知れません。

今年は、5月18日・19日が、スリランカの多数派である仏教徒にとって最大のお祝い行事であるウエサックです。(陰暦であり毎年日にちが変わります)

例年ならば、家族連れで、夜通し街へ出て仏教説話やブッダの生涯を描いたイルミネーション(トラナ)

を見たり、大きな会場では演劇や歌劇もあり、無料給食所で食事したりする人が多くいました。

例年の様子は、「スリランカ トラナ」でネット検索してください。たくさんイルミネーションの写真が見られます。

今年は、事件の発生を防止するために、夜間外出禁止や不特定多数の人が集まる行事などが規制されているようで、バスターミナルや街の広場では普段と変わらない光景でした。いつもはウェサック前の1週間ぐらい前から機材が持ち込まれ、準備されていました。

今日（5月17日）は、滞在するコロombo近郊のマハラガマの街を見て回りましたが、数日前よりは、飾り付けのランタンなどを売る店が増えており、店舗の軒先にもランタンを飾るところも増えていました。

マハラガマの街の中心でも、例年は大きなイルミネーションが準備されていましたが、今日は普通の駐車場として使われていました。

商店街には、ムスリムの人々が経営することが多い宝石店や貴金属店もあり、これまでは、白い帽子を被り大きなひげを蓄えた男の人や全身を黒く覆った女性たちをいつも見かけましたが、きょうはそうした人を見ることなく、服装の自主規制や外出規制がされているのかも知れません。

5月は、イスラム教のラマダンの時期でもあり、宗教的な生活意識が高まるにもかかわらず、ムスリムらしい習慣や服装や制約されることは、多数派社会からの圧力と感ずるかも知れません。

滞在するお寺では、境内のあちこちに、昨日から仏教旗（六色旗）の幟や飾り幕などを設置しています。

小僧さんたちが、朝から手作りで紙を貼ったりして大きなランタンを作っていました。

例年ですと、寺の境内にも大きなイルミネーションが作られるのですが、今年は建物の軒先にランタンを下げるだけの簡素なものでした。

朝は、寺院のお坊さん三人で、周囲の道を托鉢して回りました。

いつものように、寺院の門前には待っている人もいて、車から降りて鉢に食事を布施する人や、通りがかりでカバンからお菓子などを出して布施する人もいました。

こうした仏教徒の日常は、変わりなく続いていくようです。

ただ、お寺でも道路に面した正門は、鉄扉があり警備の人が立つことがあり、境内には駐車できないとの掲示があり、通路の途中には、車止めが設置されていました。

滞在するお寺では、お坊さんの生活棟（精舎＝ビハーラ）が、境内の奥にあるのですが、その精舎の鉄門は閉じられており、車が入れないようになっていました。（これでは、門は開いており建物の玄関わきまで車をつけることができました。）

ウェサックの期間が、対立や暴力を産まずに、平和と和解に繋がるように無事にすんでほしいと念じています。

2019/05/19

スリランカでは、4月に起きた連続爆発事件の後、非常事態宣言や夜間外出禁止などが出され、まだ人々が日常の生活に戻るまでには至っていません。

デマの拡散や宗教対立を煽るとの理由で、SNSなども遮断されていましたが、現在はFACEBOOKなどは繋がるようです。

仏教徒の最大のお祭りであるウェサックの休日が無事に終わり、当地の新聞報道では、民族・宗教・言語などの違いを理由にした暴力事件などはここ数日は起きていないようです。

いつもの年ならば、仏教徒は家族そろってお寺に行った後、夜中まで街で大きなイルミネーションを見たり、いろいろな催しに参加すること普通でした。

今年は、多数の人々が集まる行事が規制され、催し物も出来なかったようです。

滞在するお寺でも、いつもの満月の日の賑わいとは異なり、日中のプージャ（法要・回向）や法話会がありました。通常の十分の一ぐらいの参詣者でした。

特に、例年では、ダハムパーサラ（日曜学校）の子どもたちの多く参加する行事がありましたが、今年
は子どもたちの姿は特に少なかったようです。

爆弾事件にIS（イスラム国）が関与していることが報道され、いつ・どこで・何が起きるかという不安
があり、人々が安心してお寺に集まれる雰囲気にはなっていないようです

そのかわり、お寺のお坊さんたちは、連日朝から晩まで、信徒の家に招かれて、バナー（法話）やプー
ジャやピリット（除災招福儀礼）に忙しくしていました。

今朝も、寺の近所の道を30分ぐらいかけて托鉢に回りましたが、路上に待っているたくさんの信徒さ
んから、鉢に一杯の食事の布施をいただきました。

通りすがりの車からも降りて、自分の弁当やパンを差し出す人もおり、仏教徒の日常生活は少しづつ戻
っているようです。

少し未来に明るいこともありました。

昨日のある新聞の一面に、仏教とイスラム・キリスト教の聖職者たちが一緒に事件のあった街を歩いて
いる写真があり、「希望」（シンハラ語 praarthanaava）とキャプションがついていました。

メイン記事は、大統領と首相のこれからのスリランカの社会についての発言と政治対立についてですが、
「後ろ側に猫の手」と書かれて、互いの「隠された爪」をほのめかしています。

他の新聞でも、宗教間の対話の記事があったようです。

その一方で、「From the Muslim extremism, the country should be saved イスラム過激主義から、国
は救われるべき」というお坊さんの署名文もありました。

イラストには、黒い背景の中に紐で繋がれた4つの宗教のシンボルが描かれています。どう考えたらい
いのでしょうか。

こちらのお坊さんに聞いても、ムスリムとISは別であると答えがあり、その一方で、ムスリム過激派は
まだスリランカにいると考える僧もいます。

勤務する大学では、3年前に「宗教の間の対話と調和」という催しがあり、ヒンドゥー教のスワミーや
信徒さん、ムスリムの聖職者や神学校の先生、カトリックや英国国教会の神父や牧師が参加され、セミナ
ーを開催し、食事を共にしたり、大学の寮に泊まって議論する場が持たれました。

アメリカ大使館の後援で、領事も参加していました。

これからも、こうした宗教間の対話が続き、人々の対立や暴力をなくし、平和と和解に繋がるようにと
念じています。

仏教徒パーリ大学 日本語講師

横尾 明親 YOKOO Akichika

